

1922年6月21日の東京商科大学一橋山岳部設立から、3年後の1925年に発行された初めての山岳部報「針葉樹1号」に、松崎武雄氏作による紀行『山讃賦』が掲載されました。そして1932年発行の創部10周年記念号（針葉樹6号）には、近藤恒雄会員の幹旋で、石川強氏が『山讃賦』を歌詞として作曲し「一橋山岳部々歌」が完成したとあります。

これが部歌『山讃賦』誕生の定説です。作詞の松崎氏は山岳部員に頼まれて山を讃える散文詩を書き、また作曲の石川氏も頼まれて、詩の原作者と一度も会話することなく、詩の漢字に歌いやすい読み方をふって音符に載せました。（参照：増山清太郎会員「山讃賦」由来、針葉樹会報77号、蛭川隆夫会員 部歌「山讃賦」の謎 針葉樹会報129号）

以来『山讃賦』は、90年以上にわたり、それぞれの時代の部員/OB会員に口伝えに歌われ、部報「針葉樹」やOB会の「針葉樹会報」、総会・新年会等の各種会合でもたびたび歌詞が掲載されてきました。そこでは、時に異なる漢字やフリガナが採用されていましたが、あまり拘らず、大らかに自分たちの習った歌い方でここまで来たというのが、実情と思われれます。結果として世代間で歌い方（漢字の読み方）に違いを残すことにもなり、今日までなお統一的な歌い方ができていないことにつながっているわけです。

しかしながら不統一はおかしいとあって、今になって統一化を目指しても、それぞれの世代が自分たちの歌い方に慣れ、深い愛着を持っているので、そう簡単なことではありません。その一方で100年の歴史をもう間もなく迎え、この先も現役部員が歌い継いでいくことを希望するにあたり、色々違う歌い方で良いわけはなく、また部外の人にもバラバラな印象を与えます。

本稿の目的は、この際後輩世代に「一橋山岳部々歌」として、統一したものを継承していきたいとの思いから、会員の皆さんそれぞれの思いや意見の集約を図ったうえで、歌い方を統一しコンセンサスを得ることにあります。

2月の三月会ではこれまでの経過をあらためて振り返り、統一に向けた考え方として、①原作に出来る限り漢字の表記は合わせる、②題名の読み方は従来通り「さんさんぷ」、③一番の「白銀」は「しろがね」ではなく「はくぎん」、「霊香」は「れいきょう」ではなく「れいこう」で統一、とのコンセンサスを得ました。（理由は後日まとめてご案内します。）

残る違いは、④四番の「殿堂」「宮廷」が、「でんどう/きゅうてい」か、それとも「ところ/みやい」か、という箇所です。これまでの情報を総合すると、どうやら70年代以前、少なくとも昭和43年卒（1968年）以前は、「でんどう/きゅうてい」であり、その後どこかで「ところ/みやい」という歌い方に変わったようで、昭和51年卒（1976年）以降は、はっきり「ところ/みやい」となり、その歌で長く歌い継がれています。そして現在の学生はといえば、「歌う機会もないのでわかりません」とのこと、今や常に20人前後の部員がいる現役山岳部員の間では、部歌の伝承が風前の灯です。従って、ここは早く統一的な歌い方を決めて、しっかり歌い継いでいくことが大切と思われる。

そこでそれを決めるためにも、どこでどう変わったのか、その経緯をもう少し調査し、統一を目指すことになりました。3月の三月会でも、1970年以前の会員は「でんどう/きゅうてい」であり。そもそも「ところ/みやい」とは読めないし、それでは軽すぎてふさわしくないとの意見でした。また1976年以降の「ところ/みやい」派は、「でんどう/きゅうてい」ではそもそも歌いにくいし、また現代では山に行くことにそれ程特別の重みを持たせなくともよいのでは、また読み方は当て字

(「紅葉」を「もみじ」、「秋桜」を「コスモス」等)でも構わないのでは等、真っ二つに分かれています。でもどこかで決めなくてはなりません。ちなみに作曲者石川氏の譜面のコピーには、この部分は残っていないようです。

つきましては、主な世代の会員の皆さんより、四番の歌い方のこの部分について、ご自分の時代の歌い方、そしてのちの変化の経緯に繋がるような情報をお持ちの方に、その情報の提供をお願いしたいと思います。そうした意見を集約しコンセンサスを得て、来る7月開催予定の針葉樹会総会で正式決定したいと、三月会に参加の小島会長、前神副会長始め、主な幹事間での方向付けとなりました。つきましては、以下の3点に絞って、ご意見お知らせください。

- ①ご自分の代の4番の歌い方はどうでしたか？
- ②4番の歌い方の変化に関して何かご存知のことがありますか？
- ③今後現役学生にどちらの歌い方を引き継いでいくべきと思われますか？

東京商科大学一橋山岳部年報1925より

山讀賦 (松崎武雄氏紀行原文のまま)

一、紫の雲、ゆらめけば

白銀を射るやきんせん金箭

おこそかに山鳴りわたり

壺香の四方に薫じて

山々はいま、明けんとす

君見すや、ひんがし東の空

(二番、三番省略)

四、あゝ、山は吾が行く殿堂

あゝ、山はわが棲む宮廷

煩惱も邪悪も忘れ

法悦と歡喜にみちて

山籟を遠くきくとぎ

うつろなく、あまひするかな。

注1、「山讀賦」は「さんどくふ」とすとす

注2、一番、二行目「白銀」は「はくぎん」で統一

注3、一番、四行目「壺香」は「れいこう」で統一

注4、四番、一行目「殿堂」は「だんどう」「か」と「ひ」「か」か？

注5、四番、一行目「宮廷」は「きゅうてい」「か」「みやい」「か」か？